

蒙疆、大同からの引揚げ

千葉県 小塚 和盛

一 大陸へ渡る

昭和十三（一九三八）年といえば、満蒙開拓を旗印に、日本は中国大陸への移住を推進している時代である。当時の父は収入が乏しく、一年生の兄、私と三歳の妹が暮らすには容易ではなかった。師範の資格を持つ母は活け花を教え、和裁の仕立てで家計を支えていた。そんな時期、軍属としてかの地大同へ出向した知人が、父に大同での木製家具製造の仕事を勧め、父もまたそれに乗り単身移住した。

それから半年余りして、仕事に目途が立ったのだろうか、兄の二学期が終了するのを待って家族は日本を離れた。しかし、元々が建築の職人である父は商才に疎く、結局現地で日本人経営の工務店に職を得て、何とか生活の安定を得たのだった。母は従軍看護婦をは

じめ、電話交換手や日本人の主婦たちに活け花を教えていて、それが縁で内地から視察や慰問に訪れる人々が宿泊する旅館に生花を飾りにも出かけたりしていた。北白川宮殿下や、李香蘭さんも見えていたのを憶えている。

大東亜戦争が激化すると、現地で除隊した兵隊さんたちも再び召集され始め、昭和十九年には、召集の兵隊さんに懇願されて、その人の農園を買い取り、現地の使用人と共に切り花用の生花や料亭などへ納める高級野菜を作り、経営も順調になっていた。当然のこと、兄と私は学校から帰ると、日暮れまで井戸水を汲み上げて、水路を通して畑に流したり、野菜や花の配達をして臨月に近い母の手伝いをしていた。

二 その日から太原まで

昭和二十年の夏、明日から二学期が始まるという日のことだった。正午に重大放送があるとのこと、近くの家でラジオの前に座った。何やら雑音の多い内容だったが、大東亜戦争のことを言っているらしい。放送が終わったので帰ろうとしていたとき、慌ただしく

隣のおばさんが飛び込んで来て「日本が戦争に負けたらしい。確かめに行つて来るから……」と、自家用の人力車（洋車）^{やんちよ}でどこかへ出掛けて行つた。当時の大同は治安も良く平穏な感じで、数回米軍の飛行機が飛行機雲を作るような高い空を飛び、郊外にある航空隊で練習機が一機被害を受けたと聞かされていた程度であつて、「戦況が不利」、「東京が焼け野原だ」、「広島、長崎が新型爆弾の被害を受けている」などということに耳に入るが、大きな声で言える状況ではなかつた。ましてや、「日本が負ける……」などと言つたら、一家全員が官憲の管理下に置かれることになる雰囲気であつたので、現実には敗戦と分かつたときはショックだつた。現地の人たちはこの事態を数日前から知つていたよ、で、「やつと知つたのか……」と言う感じであつた。父は軍関係の仕事が多く出張も長期に亘ることがあつたが、「日本が負けそうだ」などの情報は耳には入らなかつたよ、うであつた。その日の午後から、これまでとはガラリと違つた生活となつた。それまでの蓄えは、

農園に注ぎ込んだので残つていない。処分しようにも買ひ手はない。ましてや現地の人は「濡れ手に粟」で手に入る土地など、欲しがるふりも見せない。しかしその後も現地の人々は我々に対し、これまでと変わらぬ態度で接してくれていた。それまでは支配者であつた者が、一転して敗戦国民になつたわけであるから、軽蔑の目や態度があつても反抗はできないのが当たり前だつた。その戦勝国民から、小孩子（子供）^{シヨウハイ}を育てるから置いて行かないかとの話が持ち込まれた。聞けば日本人の子弟は頭脳明晰なので、今後の建国に役立つてもらいたいからだとのことだつたが、もちろん両親は断つたその後日知つたものだつた。

そうこうしているうちに少し落ち着きを取り戻すと、帰国の費用は公費で賄つてくれるらしいことが分かつてきた。しかも家財や日用品はチツキ（鉄道手荷物）にまとめ、身の回りの品だけを持って列車で移動するとの話しだつた。このときはほとんどの人が、「数日間帰国できる」「チツキは列車と同行し、帰国後す

ぐに手許にくる」との先入観があつたのだろう。冬物や晴れ着類は、すべてチツキに回されたのだった。何と平和ボケしていたことだろう。結果は、夏服一枚で初冬に向かうことになつたのである。一緒に働いていた現地人は土着の人ではないことから、持ち帰れない品物をお世話になつたお礼の意味を込めて、早めに無償で譲り渡した。この現地人は片手間に洋車曳きをやつていたが義理堅く、荷造り集荷場への搬送に自前の車を荷車代わりにして、最後まで面倒を見てくれた。

引揚げの日取りは前半、後半と二日に分けられて、我が家は後半になつた。前半のその日、日本人が出発するのを待ち構えていた現地人は、雪崩のごとく主のいなくなつた家へ飛び込み、あらゆる品物を持ち去つて行つた。それから何時間経つただろうか、日が暮れだしたところに、駅へ集結したはずの人たちが、続々と戻つて来たではないか。そして先発した知り合いが我が家を尋ねて来た。聞けば、北京への鉄道は途中の張家口駅を八路军に占領されていて、列車は動けないとのことで、戻つて来たら家の中は前述のごとく何も残つ

ていない。取りあえず、今夜の食糧を分けて欲しいとのことだった。その知人は、翌日からは元の使用人たちが面倒を見てくれたようである。

この日から数日後、太原まで南下して北京へ向かうとの連絡があつて、妊産婦や幼児は陸軍病院の傷病兵たちと共に行動するように、と指示された。臨月だった母は、幼稚園児の弟と共に一足先に家を出た。残された男ばかりの親子三人は、前回の轍を踏まないようにと慎重に構えていたが、出発は確実となり、母たちが出掛けた翌日だつたと思うが、我々も駅へ向かつた。詰められるだけ話めてビヤ樽のようになつたリュックサックは、歩くたびに背中を左右に移動するので、それにつられて自分の体もふらふらとなつた。父は「この力無し」と怒鳴るが、まともに歩くことはできない。見送りに来てくれた元使用人の洋車にそれを乗せてもらい、何とか大同駅にたどり着いた。列車は既に入線していて乗り込むことはできたが、一向に動く気配がない。陽が高くなると、車内には熱気がこもってくる。それを目当てに商魂逞しい現地人たちが、西瓜やその

他の食べ物を売り込みに列車の周りを囲む。既にインフレの波が始まっていたが、暑さに耐えられない人たちはそれを買い求めている。線路上にはその食べ物かすと、車内から流される排泄物に蠅などが群がり、異様な臭気が立ちこめている。我が家は銀貨を少し持っているだけであるから「欲しがりません勝つまでは」の精神でじつと我慢をしていた。

夕刻になると「今日の出発はないので陸軍病院に泊まる」との連絡があり、引き込み線経由でそのまま移動する。「やれやれ、これで臭気とはおさらばでき、母たちとも会えるのでは」とほのかな期待を持ったが、既に病院はもぬけの殻で、がらんとした病室とベッドだけの有様だった。それでも炊飯設備は稼働が可能だったようで、何とか空腹だけは満たすことができた。

翌日は、午前中に最初の目的地である太原へ向かって列車は動き出した。万里の長城の下をトンネルでくぐり、一路南下する。車窓から見えるその長城の威容を、カメラならぬ脳裏に納めながら、列車は南下した。途中何事もなく太原駅に到着。日程的には丸一日程度

の行程だったと思うが、正確なところは思い出せない。とにかく太原駅では列車から降ろされて、収容所になっっている市内の日本人学校へ誘導されたことと、ほとんど大豆だけが目につく米飯にありついたことだけを覚えていいる。

三 家族との再会

父は、先に出発した母たちがこの地で病院部隊と別れ、市内の割烹旅館に収容されているとの情報を得て、市内を歩き回り尋ね歩いた結果、その旅館を探し当てた。そこから帰って来てからの話では、その旅館は男手が少なく収容能力もあるからとのこと、そちらに合流することとしてこれまでの編成から移ることにした。この直後に、母は出産した。生まれたのは弟だった。そんなことから父の指示で、兄と私は炊事係の手伝いをする事となった。炊事係の人たちは本職の板前さんであって、その見事な包丁さばきで、瞬く間に収容所全員の食事ができ上がったが、それを配ったり食器を回収し、洗うのが私たちの仕事となった。何せ収容されている人は出産前後の人がほとんどである。

赤ん坊の睡眠に気を遣いながら、食事を運んだり空になった容器を大切に持ち帰らなければならない。幸なことに、これらの食器類は割烹旅館であったことから、種類や数も充実していた。専門家が調理をしているのを眺めていると、なるほどと思うことが多々あり感心していると、「キャベツを切れ！」と言われ、母の台所仕事を思い出しながら一枚ずつはいでいると、「何をやってんだ！」とのお叱りの言葉が飛んだ。すぐに取り上げられたキャベツの球は「サッ！」と水洗いされ、そのまま包丁が入れられた。よく考えれば、一般家庭での調理法と大勢の人々の食事を準備するのでは、違って当たり前であることを考えついた。今もその時の印象は忘れられない。何日分ずつかの副菜の仕入れにも同行し、山盛りの野菜類を積んだリヤカーの後押しをしたりして、現地で世話をして下さっている人々の手伝いに励んでいた。またある時は、胞衣処理でブレーキの効かない自転車に乗って、火葬場へ行ったこともあった。いずれの場合も、外出は治安上の理由から複数の人で行っていた。

ところで、太原で最初に收容された市内の日本人学校での給食は、ほとんど大豆だけの米飯であったが、ここでの食事は何と豊かな食事であったことか、印象に残っている。自分なりの判断であるが、乳幼児対応として特別待遇されていたのではないだろうかと思し、それに宿泊設備においても個室的な待遇であった。学校に收容された人々は、板敷きの教室にゴロ寝で毎日を過ごしていたと思う。

そんな生活が続いていたが、ある日「二日後に北京に向けて出発する」との一報が入った。炊事係は二手に分かれて、携行食としての大豆の甘辛煮を作り始めた。一つは固めに仕上げたもの、もう一つはふつくと煮あげた品の二種類ができ上がった。そんな慌ただしい中、夕食時に同席していた妊婦さんが突然産気づいた。翌日には出発である。子供心にも私は「このおばさん大丈夫かな？」と心配しながら夜を過ごした。そのおばさんは出発の朝、集合したときには嬰兒を白布に包んで抱き抱え背中にリュックサックを背負い、手に荷物を持った姿で集まっていた。まさに「女は弱

し、されど母は強し」とはこのことと、おませな少年であつた私は実感した。

四 太原から豊台へ

乗せられた列車は、前回の客車からは少々格落ちの兵員輸送用であつたが、私たち兄弟は座席の下に「ねぐら」を見つけ、潜り込んだ。好奇心が旺盛だつた私たちは、小さな窓から外を眺めていたが、印象に残つたのは、すり鉢の底から抜け出るように、何度も同じ景色を見ながら高く登って行ったことだつた。どのくらい乗っていたかは記憶にないが、太原を出発した日でなかつたことは確かである。列車は草原の中で停まつてしまつた。この先の鉄橋が爆破されたので、歩いて川を渡れとのことになつたが、目の前に見える鉄橋は無残な姿を見せ、向こう岸には暗いトンネルが口を開いていた。迎への列車はその先で待っているのととで、急な崖をリュックサックを背負つて、大人たちの手を借りながら川原に降りる。川水は少なく、所々に板を渡してあるものの、飛び石伝いに渡れるようになっていた。渡り始めると、例のごとくにリュックサ

ックは勝手に背中で踊り出す。それを必死で押さえ、周りの人たちに支えられながら、何とか渡りきる。今度は崖に造られたわずかな幅のつづら折りの道を蟹歩きで登る。後で聞けば、この近くに駐屯していた日本の軍人たちが、我々のために準備をしておいてくれたとのこと。

一次は、トンネルの脇を回り道して出口へと歩いた。そこに待っていた列車は、何と鉱石類を運ぶ無蓋の貨車であつた。敗戦国々民の情けなさを、切実に思い知らされた。全員が乗車すると、間もなく「これから先は治安が悪いので、夜は走らず車内や駅の施設、あるいは倉庫などに分散して寝ることとなる」と知らされた。そんな中、車上には機関車の吐き出す煤煙と、陽よけ兼用でシートが掛けられ、女性のためにバケツと毛布で車内に仮設のトイレが作られた。さらに、この車両は人間が乗ることは想定しない造りであるから、乗り降りには梯子が使われたと思うが、ホームではない路線敷きに掛けるのだから、女、子供には相当な苦勞だつたと思う。生後間もない嬰兒には、母乳を確保

する必要があるので、三食の食事は絶対に欠くことがならず、共同で早朝に飯盒炊飯とした。焚き木を集める人、火を起こす所に穴を掘る人、米などを準備する人など、みんなで協力し合って短時間のうちに炊き上げなければならぬので、当然私たち子供も狩り出され、小枝一本でもと拾い集めに奔走した。これらの仕事は当然男性の仕事になり、お陰で自然と水加減や炊飯の方法を覚えた。この記憶はあるが、何を「おかず」にしたかについては覚えがないのである。おそらく、太原で作られた煮豆と女性たちが缶詰などを準備していたのである。幸い天候に恵まれたが、寒さだけは確実に近づきつつあった。記憶があいまいでこの駅ということはできないが、溜め池の向こう側でおしめを洗い、こちらでは米を研いでいる風景を記憶している。よくぞ健康で帰国できたものと、不思議に思う。こうした努力があっても、若い母親の中には乳が出ず、もらい乳をしていたのも見ている。

そんなある日の夕方、今夜はここで泊まりになるのかと思っていたそのとき、銃声の音と共に頭上を、「ヒ

ューン、ヒュルル……」と弾丸の飛ぶ音がした。「危ない！ 引つ込め！」の声に思わず首を引つ込めたが、怖い物見たさに銃声のする方を柵板の隙間から覗いた。刻々と闇に包まれる高粱畑の中から銃火が光り、その距離が二百メートルほどに近づいたときに、突然一挺の機関銃が武装解除前の日本軍側から火を噴いた。すると、こちらに向かつて射っていた銃火はピタリと止まり、退却を始めた様子が薄暗い中でも見えてきた。日本軍の機関銃も撃ち方を止め、そのときは我が方には被害もなく、無事に終わった。

その夜、倉庫の中で手洗いに起きたところ、「明かりをつけるな！」の聲がかかった。不寝番の人がいるらしく、周囲に八路军が迫って来ているのとことで、言うようにして用を済ませ朝を迎えた。外へ出ると、目の前を血の気の引いたような顔をした日本の兵隊さんが、担架に乗せられ横切った。昨夜の襲撃で負傷したのか？ と思うと、恐ろしさで感謝の気持ちが入り交じり、複雑な気持ちになったことは、その情景と共に今も忘れられない。

その日は、陽が高くなっても列車は一向に動かない。聞けば、地雷で被害を受けたので復旧工事をしているとのことだった。多くの大人の男性たちはその作業に従事し、夕方漸く復旧工事は終わったが、その人たちの話では、我々が乗っている列車を、軍需物資の輸送列車と間違えたらしいとのことだった。当時八路軍の遊撃隊は、地雷用に硝石だけを持ち歩き、その他の材料は現場近くで鉄道用設備、資材を略奪して作っているのだと聞かされた。この事態を想定していたのか、この専用列車には、レールや関係資材を積載した車両が連結されていた。

二晩過ぎたこの駅を出発した列車は、その後も昼間のみの走行ではあったが、垢と煤煙にまみれながら、北京へあと少しの地点に到達したころ、行き先は北京ではなく豊台であるとの話が伝わってきた。いよいよ豊台が近づいたのか、列車の速度が落ちる。思わず首を出すと、線路が大きく迂回し、そこには蒸気機関車と炭車と共に横倒しになっていた。それも一方所だけではない。三方所はあったとの記憶がある。この周辺

は、これまでの畑や原野の中とは違い民家の点在している地域である。ゲリラ攻撃には、隠れ場所としても地雷を作るにも都合が良かったのかもしれない。

無蓋貨車に揺られての旅は、何日間だったか記憶はないが、この間乳幼児のあせも発症予防に皆が協力し、車内で携行燃料を使って湯を沸かし、清潔を保つていたのを、靡気ながら思い出す。

五 豊台での生活

やっと豊台へ到着した。豊台は日本軍の補給基地があった所で、戦闘用の機材はいざ知らず、ほとんどの衣・食が保管されているらしいことが徐々に分かってきた。当時の日本軍は男性だけの軍隊だったと思うが、女性専用の下着類もあったようだ。よく考えてみれば、従軍看護婦さんもいたことから少しは理解できるが、大人たちの間では慰安婦用だと囁く声も聞かれた。収容所に指定された建物は、天井が高く床はコンクリートで、重量物にも耐えられるような頑丈な造りだったと覚えている。翌日から所帯ごとの間仕切り作業が始まった。いろいろな職種の人たちがいることから、板

や角材、そして毛布などを組み合わせ、瞬く間にささ

やかではあるが、ある程度のプライバシーが確保できる場所が完成した。兄と私は、またもや父の意向で、別々の炊事班に手伝いとして行かされた。同年代の子供たちは、引き込み線のあちらこちらにある、トロッコや何かの機材を見つけては遊んでいるのにと羨ましく思ったが、父の言いつけには逆らえなかった。炊事班は屋外に天幕を張り、地面を一段掘り下げて竈の焚き口が造られていた。釜からして、野戦と名の付く全くの仮設である。係の人たちはやはり板前経験者だと思うが、その脇でテント生活をしていた。

六十年余りを過ぎた今、薄れかけている記憶の奥底から当時の風景、状況を思い出して考えると、広大な補給基地であっても勤務する兵員は少なかつたものと思う。このため、大勢の引揚者に供給する炊事施設は、仮設するしかなかったのではないかと想像する。この場所には水道設備もあり、近くには厩舎があることなどを考え、それまでは馬場だったのではないかと推理すると、収容棟から離れた場所にあったことからもち

棲が合う。

そのような環境の中で多くのことを学んだ。初めて馬車を使って食材を運んだが、馬は厩舎に帰ろうとするが、それを子供一人で引つ張って炊事班へ向かわせることは、並々ならぬ苦労だった。朝夕の飯が炊きあがるころになると、他の釜からは味噌汁の匂いが漂い出す。このころ合いを見計らって、皆さんが待っている収容棟へ出掛け、「飯上げ！」と怒鳴って回るのも私の役目であった。何世帯かごとにまとめられたグループから当番が受け取りに来るころには、それぞれの人数に合わせて配分された食事用のバケツが並び、声を掛け合いながら受け渡しが行われる。ところで収容棟に持ち込まれた食べ物、世帯ごとに配られるのだが、汁ものは飯盒などに移されるが、飯は人数によつては入れ物が不足する。このときに利用されたのが、洗濯に使われる浴場用の木桶であったことを記憶している。まさに、「味噌も〇〇も一緒」のたぐいであつた。

このような中であつて、乳の出の悪い母は重湯を作つてもいたが、もらい乳も多かつたようである。ある

母親は張る乳首に耐えられないのか、自らの乳首を十字に切ったのを見かけた。戦争で配偶者と引き裂かれ、乳飲み子を抱える女性の強さには、子供ながらも尊敬の思いであった。

どのくらい日数が経ったかはつきり覚えていないが、たしか彼岸の中日だったと思うが「おはぎ」が作られ、菓子職人さんが餡にする小豆の煮方から味加減、つぶし方、餅米の水加減などを板前さんに教えている中で、サツカリンという甘味料があるのを知ったが、これは私の知恵にとつては収穫だった。父の意向に従い、嫌々ながら炊事班で働いていたが、その反面にはいろいろな体験や様々な雑学を仕入れることができ、今となれば良い勉強だったと、感謝している。風呂の設備もあったと思うが、記憶が薄れてどのような設備だったか正確に言うことはできない。多分、ドラム缶を利用した五右衛門風呂ではなかったかと思う。もちろん、洗濯もできたが盗難が多いらしく、監視付きで干していた。外出も許されていて、多くの人が買ってきたのは染料だった。これで軍服を染めたのである。

少しでも他人と違う物をとという「お洒落」感覚か、それとも盗難除けか。ところで、軍用の衣類が手に入れた経緯について断定はできないが、ほとんどの人たちは、このように途中何度も待機させられるとは想定しなかったことから、寒さ対策がなかったのである。これを救うために、接収される前に物資を放出してくれたいものと思う。このことは食料についても同じで、特に妊産婦や次世代を担う乳幼児には、特別な配慮があったのだろうと思っている。

収容所生活が長くなると、帰国の予定日が何となく漏れてくるようで、子供の私にはよくは分からなかったが、夫婦が別れるとの話が聞こえてきた。一瞬啞然としたが、単身赴任の形で一旗揚げようと渡航してきた男性と、それを目当てにした女性との間の話であった。男女間の複雑な葛藤をまの当たりにして、おませな少年は人生の隠れた一面を見せられた思いだった。そのうちに、天津に向かう話が具体的になってきた。

六 豊台から天津へ

天津への出発の日が近づくにつれ、子供には分から

ない法的な手続きが行われ始めたらしい。各ブロックのリーダーたちは、日本の地を踏んだら他人となる男女を探し、面倒を見ているようであった。それまでは、この地を出たら船に乗るのだと勝手に思い込んでいたが、天津に移るとのこと、いささか拍子抜けしたが、これまでと違い日数的にも精神的にもゆとりができていたのか、慌ただしさは感じられなかった。お互い日本での落ち着き先を尋ね合ったり、日本の被災の情報を得ようと収集に精を出していた。家族や身内が、安全に暮らしているという確かな情報は無い。ただただ自分の落ち着き先だけは無事であって欲しい、と思う気持ちであったことだったろう。両親もその気持ちは同じで、かつて住んでいた家は借家だったし、焼け野原だとの情報もある。父方の日立市は、艦砲射撃を受けているということで、実家は海岸沿いだから全滅しているかもしれない。では、母方はどうか。千葉は軍隊の街だから被害は少ないのではないか、などと両親は落ち着き先をどこにするか、決めかねていたようだった。そんな心配をよそに、私は教科書で教えられて

いた「海」という所が見られるという嬉しきでわくわくしていた。

豊台を出発したのは十月も半ばを過ぎていたと思いが、寒さは日増しに強くなり、炊事場の周りには氷が張るようになっていた。六年生にしては体の大きいほうだった私は、だぶつく軍用外套に身を包んで列車に乗った。記憶では有蓋貨車だったと思うが、乗車時間が短かったので確かな記憶ではない。

七 天津から塘沽まで

豊台から少しでも港へ近づいたことは、それだけ日本が身近に感じられるのか、一同の顔からは日に日に険しさが薄らいでいくように見られた。そんな中、幼い子供が相次いで亡くなるという事態が起きた。日本を目の前にして、我が子を亡くした親御さんの気持ちはいかばかりかと考えていると、大同で数え歳の五歳で死んだ妹のことが思い出された。この天津の収容所は、豊台と規模で比較することはできないが、同じような機能を果たしていた場所のようで、構内の広さはさほどではないものの、同じような生活だ。ここでも

父は私ら兄弟に出稼ぎ？ を命じたのであった。炊事は専用設備のある棟で行われていることと、対象となる人数が少なかったこともあつたらしく、私の仕事は指令班の使い走りをするこゝとなり、相変わらず「飯上げ！」と怒鳴つて回つていた。このような穏やかな生活が続いているある日の夕方、別棟の一団から、乗船命令が出たから「お先に……」ということを含めて、我々を慰問に来てくれた人がいた。プロカアマチュアかは分からないが、「誰か故郷を想わざる」など故郷を想う心の歌を数曲、ハーモニカの伴奏で聴かせてくれた。聴衆は羨ましさで故郷を思い出す郷愁、そして感謝の拍手の中、涙ぐむ姿もあつた。

十一月も下旬になると、寒さは一段と厳しくなり、コンクリートの床に毛布を敷いただけの寢床は寒さが身にしみていた。そんな中で、体温の暖かさが吸い寄せた風しほの餌となつていた我々にも、乗船命令が出た。貨物ホームで列車の入線を待っていると、占領軍兵士を乗せた列車が通過したが、構内であるので速度は遅

く、乗っているのは白人のようであつた。そんな中から、キャンデーがバラバラと投げられた。私も手を出して拾つたが、紙に包まれているので口へ入れるのに抵抗はなかつた。父を見ると、父は列車の方向へ頭を下げているのが目に入った。そのときは、数カ月前までは憎い敵兵と教育されてきた私には、その姿が情けなく感じられた。幼少のときから軍国主義の教育を受けていたからだろう。施しを受けたのであれば、感謝の意を表わすのは当たり前だが、そのときの私たちの姿は、かれらからは乞食のように見えたのだろう。

やっと乗り込んだ列車は、有蓋の貨車だ。塘沽で降ろされた日は、みぞれの降る寒い夜であつたことが、改めて思い出された。

八 乗船そして佐世保へ

乗船のための手続きで並んで順番を待っていると、名前を呼ばれて列外へ出される人たちがいる。何事か分からぬままに、言われるとおりに従う人の口から「検便の結果かしら」という言葉が耳に入る。太原で生まれた弟は、「はしか」の免疫がないからと母の血清を天

津で注射されていたことや、伝染病の怖さを軍医から聞かされていたことなどが頭をよぎった。しばらくすると、「戦犯と同姓の人は調べられるのだ」などというデマらしきものが流れた。乗船検査では、書物、写真などはもちろんのこと、カメラなどはすべて取り上げられるだけでなく、取り調べも受けた。乗船できないかもしれないことから、前もって焼却したり、壊したりした人も大勢いた。足踏みしながら寒さに耐えていた。検査が終わるといよいよ乗船だ。引揚船は米軍の上陸用舟艇だということは知っていたが、どのようにしてどこから乗船したのかは、記憶にない。船底へ降り、広い鉄板の床に座ったことだけは、はっきり覚えている。寒さから解放されると、ペンキと油のおいが鼻についてきた。床は船底に近いはずだが、冷たさを感じられなかった。だが、エンジンの音は気になる。見上げると、船首に近い場所はベランダ状になっている。乗組員の姿がちらちらと見える。この船で何日か後には日本へ着くのだと思うと、嬉しさがこみ上げてくる。横になる広さはあるので、荷物を枕にし

て横になると、すぐに眠ってしまった。

朝になった。なぜか船が止まっているように感じたので、甲板に出てみた。確かに止まっていたが、それは陸地の見えない大海の中であつた。驚いたのは、その海である。「海は広いな大きいな……」という童謡の歌詞とはほど遠い黄土色である。不思議に思いながら穏やかな水面を眺めているうちに、教科書にあつた「黄海」の名の由来を思い出して納得できた。航行を始めると、大人の男性たちには「使役」の命令が出る。父も、今度は私たち兄弟に言いつけることはせずに、自分から出掛けて行つた。仕事は、甲板の塗料剥がしだつた。カンカンという音を立てながら、ハンマーでペンキを剥がすことから、この作業はカンカン虫と言われると聞かされた。このころから、船は前後左右に揺れ始めた。玄海灘に突入したのだ。甲板にいる限り酔いは感じないが、船底にいとペンキや油のにおいに刺激されるのか、酔う人が続々と出てきた。酔い止めの水薬が希望者に配られた。私は、お陰でそれほど辛い思いはせずに済んだ。男性の「使役」は、揺れ

が厳しくなり甲板がしぶきで濡れだすと危険と判断されたのか、それ以後「使役はなくなつた。しかし今度は、密かに「女を出せ！」との要求があつたらしく、

なりわい

かつてそれを生業としていた女性が何人か自発的に応じたと耳に入つた。これも、「使役」のうちに入るのだらうかと思つたりした。人間生きるためには食べなければならず、排泄もする。女性たちのためには、船底の片隅に毛布とバケツで応急設備が作られていたが、前後左右に揺れる中での使用は大変な苦痛であつたことと思う。一方、男性用としては甲板上にドラム缶を縦割りにして、それに板を乗せたものが作られていたが、囲いのない全くのオープンである。落とされたものはそのまま海へ流されるようになっていくが、間断なく揺れる船上で使用するには、甲板の手摺りに掴まっていなければならぬ。さらに飛び込んでくる海水で溶かされた汚物は、しぶきと共に跳ね返ってくるのである。そんな状況の中で、これを使つた人はどれだけいたろうか。おそらく目には見えないが、汚物まみ

れになつていたことだらうと思つている。

船底にいとペンキのほかにも様々な悪臭で気分が悪くなるので、寒さに耐えながらも甲板に出ている。目に入るのは灰色の空と青黒い海、そして前後に同じ型の舟艇が見えるだけである。それでもこの先に日本があるのだと思うと、見えるはずのない水平線の彼方に、日本の島影を想像していたのだつた。

何日かして揺れがおさまつてくると同時に、青く澄んだ空がのぞかれた。太陽も心なしか暖かく感じるようになると、船酔いに悩まされていた人たちも、甲板に上がつて来て、船首方向に目を凝らすようになった。

「島だ！ 日本だ！」の声に元気づいた船底では、下船の準備にと荷物をまとめ始める。翌朝だつたと思うが、エンジンの音が静かになり港に入ったことが感じられ、リーダーから「船首が開くので、声が掛かるまでは動かないように」との注意が流れる。着岸までは十分に時間があるので甲板に出ると、目の前に赤錆びた大きな船体が飛び込んできた。こちらの船に比べてあまりに大きく、近くで眺めていても甲板上は見えない

いくらいだった。だれかが「空母だ！」と叫ぶ。真偽は分からないが、帝国海軍のものであったとすれば、わずか四カ月の間にこんな哀れな姿になるのかと、落胆して船底へ降りると、すぐに前方の扉がゆつくりと開き始める。

九 上陸開始から母の里へ

下船が始まりそのまま検疫所へ誘導され、消毒と称して頭から粉末の薬剤のDDTを掛けられた。後日のことだが、この方法では下着の中までの浸透効果が弱いのと、掛けられた人たちは何が何だか分からずに、気持ち悪さから収容所に着いてから、頭はもとより脱げる衣類は全部脱いで薬剤をはたき落としてしまったのだ。冬物の肌着などにしがみついている虱とその卵は安泰だったようで、落ちて着いてから衣類の煮沸消毒をするまで、虱との共同生活が続いたのだった。検疫所を出ると、女、子供組は荷物同然にトラックに乗せられる。私は柄が大きかったことからか、男性組の方に回されかけたのだが、母の機転でトラックに乗ることができた。父や兄たちはリュックサックを背負い、

上着の前を開いた格好で、同じ道を歩いて収容所へ向かわされたのだった。父や兄たちのこの姿をトラックの上から眺めた印象は、八月十五日が近づくと、有名な漫画家の描いた焼け跡に佇む被災者、復員兵のイラストの格好とダブリ、今も脳裏に浮かぶ。

一同が収容された建物は、旧海軍の施設であったように、講堂のような板張りの床だった。ここでいろいろと世話をして下さった方は、若い元水兵さんのような感じの人たちだった。船中では、船酔いと排泄不良で食事がほとんどとれなかったが、生理的要求も満足し、衣類に染み付いたペンキなどの匂いが薄れてくると、猛烈な空腹を覚えてきた。支給された麦飯は甘く副菜は沢庵だけだったと思うが、何よりのご馳走であった。食事が済むと入浴である。浴室は広く、大きな浴槽の中ほどで高圧蒸気が吹き込まれて沸かされているのには驚いた。これが海軍式なのかもしれないと思った。しばらくぶりの風呂である。ゆつくりと漬かっていたかったが、続々と入って来る人のために大急ぎでこびりついた垢を流し、早々に浴場を出た。これま

でのコンクリートや鉄板の上、あるいは貨車の床と違い、しっかりとした木の板張りは寝心地が違う。横になると、すぐに睡魔が襲ってくる。

熟睡できたせいか、海が見られる楽しみもあったのか、早くから目が覚めた。朝食後、大人たちは帰郷の手続きを始めた。父からの労働奉仕の言いつけはなかった。もつともこの滞在は数日で、手続きが終わり次第、それぞれの故郷への旅が始まることだった。呪縛から解放されたような感じで、外へ飛び出す。目の前は、海ならぬ広い川であった。後は緑の丘になっている。名ばかりの柵があったが、難なく乗り越え、一般の道路に出た。素焼きや日乾し煉瓦の家を見慣れていた目には、新鮮とも言える典型的な日本家屋がそこにあり、辺りは緑が繁茂して、夏蜜柑が黄色に色づいていて彩りを添えている。もつと見たい、探検したいとの気持ちはあったが、両親にも断わらずしかも無断で柵越えをしてきた弱みもあるので、ひとまず引き返すことにする。あまりにも、みずばらしい格好の子供が物欲しそうに眺めていると思われたのだろうか、

その家の人が大きな夏蜜柑をもいしてくれた。あまりの嬉しさに、お礼もそこそこに母の許へ走って戻った。その後も何回か柵越えて海が見えないかと歩いてみたが、一向に見ることはできない。考えてみれば、佐世保港に上陸してトラックでここまで運ばれたのだから、海が近いはずはなかった。

瞬く間に数日が過ぎ、故郷への出発を心待ちにしていたが、なぜかもう四、五日先になるとの話聞いた。手続き上のことなのか、列車の手配のことなのかよく分からないが、戦後の混乱期であるから、計画などあっても無きに等しいころのことであり、致し方なかった。

そんな雰囲気を感じさせない、穏やかな佐世保の収容所を出発したのは、上陸して一週間余りが過ぎた夕方であった。南風崎駅発で、終着駅の記入されていない切符と、生後間もない赤ん坊でも当時としては大金の千円をもらった。突然周囲が騒がしくなり、泣き声が聞こえてきた。何事かと聞き耳を立てていると、赤ちゃんが突然息を引き取ったとのこと。列車に乗る直

前の出来事に一同呆然としたが、その母子を置いて我々は駅へ向かった。

ホームには貨物列車が入っていて、この列車に乗るのだが、荷物を背負ったままでは全員が乗ることはできない。荷物は片隅に積み上げ、人間は立ったまま詰め込まれた。南国の長崎といっても十二月の夜は寒いが、ぜいたくを言ってはられない。言われるままに乗り込んだ引揚者専用列車は、大阪へ向けて発車した。子供と言っても六年生の私は、皆と同じにお互いが寄り添って倒れないように立ったままである。海底トンネルとはどのようなものと想像を膨らませていたが、うつらうつらの間に通過してしまった。

朝になって、広島駅で一時停車する。扉を開けると、辺りは一面の雪景色である。ほとんど雪の降らない大陸にいた人たちは、珍しいのか線路に飛び降り、雪の感触を楽しむ一齣もあった。だれかが「ここは原子爆弾が落とされたので六十年間草木も生えないぞ！」と言っていた。少しでも楽になりたいの一心から、私も手足の屈伸運動をしに外へ出る。積雪量が少ないので、

周辺の景色はよく分かる。今にして思えば、雪が無ければ、悲惨な光景がもつとはつきりと目に映ったことだろう。近くに目を転ずると、道路には米軍のトラックが行き来している。何気なく隣の車両を見ると、全く困いの無い床だけの車両に、外套の襟を立てて背中を丸めた復員兵と見られる服装の人たちが、荷物の回りに座っていた。その有様を見て、ぜいたくは言っていられないと思った。

広島を過ぎたころから、ぼつりぼつりと数人ずつが下車し始めて、少しずつ床にもゆとりができた。大阪駅へは夜遅くに着いた。これから先は各自で行動するようにとの指示で、引揚者の団体は解散となった。既に東京行きの最終列車は出た後なので、ホームで一夜を明かした。翌朝、一般乗客から胡散臭い目で見られながら、しばらくぶりの三等車に乗って東京へ向かう。東京駅に着いたのは夜も遅く、千葉駅へ向かう電車は最終だったと記憶している。何故か。それは「南風崎」からの切符を渡してしまえば、それからは自腹になるので、私たちが荷物番にして両親は母の里へ様子

を見に行っている一時間余りの間にも、次の電車が入って来なかったからである。幸いなことに母の里は焼け残り、数人いた奉公人は全員応召などで空き部屋があったことから、豊の部屋で布団にくるまって寝ることができたのであった。ときは、昭和二十年十二月二十日であった。

十 生活再建

母の里へひとまずは落ち着いたものの、明治生まれの両親、特に父は屈辱的な気持ちがあったのだろう、茨城への転居を望んだが、現地の住まいに目途が立たず、結局伯父が提供してくれた土地にブラック小屋を建て、移り住むこととなった。押し寄せるインフレの波で、佐世保で支給された六千円とリュックサック内の財産は、あつという間にブラック建設費に飲み込まれてしまった。当然のことながら、食べるためには家族全員が収入の道を探さなければならなかった。父は大工仕事を、母は生花店を開き、兄はそれを手伝いながら都内の生花市場へ。私も進学を断念し、電気工事会社の倉庫係として勤めに出た。食糧は配給制とは名ばかり

で、闇が当たり前であった。現在ならば雑草と呼ばれる野草が副菜、たまに配給された鯨肉は大のご馳走であった。主食は少ない配給米の雑炊、薩摩芋も多かった。他に、馬鈴薯から澱粉を取ったかすを発酵させて作った名ばかりの臭い餅。薩摩芋の苗を取った後の、ブヨブヨになった種芋などが思い出される。

三年後、家族一同の努力で何とか食べることにこと欠かなくなると、あきらめきれない勉学への希望が頭をもたげ、職を転々としながらも夜間の専修学校を卒業し、当時は安月給の代名詞にもなっていた公務員に採用され、生涯下級公務員を覚悟していたのだが、それまでの経験が買われたのか、転地転勤を重ねる中、戸建て住宅を持つことができた。

あとがき

帰国後二年ぐらい経ったころと思うが、所用で都内へ行ったときに、引揚者専用の列車に遭遇した。「一般の方は乗車できません！」とのアナウンスに、「随分と優遇されてるな。それに引き換え……」と思ったが、我々は終戦の年内に帰れた幸せがあるのではないかと思直

して、自分の羨む気持ちを恥じたことだった。戦後の混乱期が落ち着き、中国東北部（旧満州）から引き揚げられた人たちの悲惨な話を聞きたびに、我々は何と幸せな旅だったのかと思えてならない。六年生の少年には、引き揚げるのが当たり前で、それに掛かる諸費用や物品の調達などには全く無知であったが、それが外務省関係者、旧軍隊の支援によるものと知ったのは、随分と年数が経ってからのことであった。特に我々蒙疆からの引揚げ集団は、妊産婦、乳幼児が多かったことから、食糧の確保、早期の帰国に配慮がなされたものと思う。このお世話をした下さった人々が、その後どのような環境で引き揚げられたのか。遅ればせながら、この文を借りてお礼申し上げます。

